

論文

イギリス「作家協会」設立とその文化的意義

麻島 徳子

序

イギリス「作家協会」(The Society of Authors)は、作家の著作権等を保護する目的で、1883年9月にウォルター・ベザントの呼びかけによって設立された。協会設立後の成長はめざましく、協会のある年次報告書によれば、その会員数は1884年当初68人に過ぎなかったものが、91年には662人となり、そしてベザントがチェアマンを辞する92年には、実に870人になったという。¹協会の活動が広く知れ渡り、その影響力を強めていく過程で、当時の文壇を代表する著名な作家も数多く加入するようになっていった。たとえば、87年にはオスカー・ワイルドやジョージ・メレディス、トマス・ハーディが加入し、88年にはヘンリー・ジェームズが、90年にはコナン・ドイルやキプリングが加入している。²1892年12月17日に行われた協会の年次総会において、ベザントは今後「作家協会」が、由緒ある王立美術院や王立内科協会、英国外科医師会、イギリス土木学会に比する存在として、公式に世間に認められるようになることが「次なる目標だ」と宣言するほどの自信を示している。³

創設からわずか10年あまりで、「作家協会」の活動が順調に軌道に乗ったその大きな要因は何か。それは、急速な読者層の拡大を経験した後期ヴィクトリア朝の文学市場において、作家らがようやく職業作家としての権利意識を「全体として」もつようになった時代の変化によるものだといえる。というのは、このような作者の権利要求を掲げて、40年ほど早い1843年に、ディケンズの呼びかけによって集められた団体(The Society

of British Authors)は、周囲の賛同を広く得られずに、設立された同年のうちに終焉を迎えているからだ。⁴のちの1889年に、*Contemporary Review*でこの団体が「全体として」まとまらなかった理由について考察したベザントは、「一言でいってしまえば、当時の文芸誌からみても一そして、間違ひなく、一般的にみても一著作権は、そもそももっぱら、出版者側の権利であった。作者一作品の生産者一はいまだ出版者の下働きだと見なされていたのだ」と述べている。⁵そして、隣国のフランスにおいて1838年創設の「作家協会」(Société des Gens de Lettres)が設立50周年を迎える頃、ようやくイギリス国内においても、フランスに倣った権利団体の設立を求める声の高まりが結実したのである。⁶

したがって、「作家協会」が設立し、1890年代初頭までにその活動が軌道に乗った背景には、こうしたイギリス文学市場における時代の要請とその設立時期が合致したことがあったといえる。1880年代から1890年代にかけて、イギリス文学市場の中心は「小説」であり、その「小説」をめぐるマーケットは大きな変動を迎えようとしていた。その劇的な変化を示す象徴的出来事の筆頭は、ヴィクトリア朝期の文学市場を長きにわたって席卷した、いわゆる「三巻本」の慣習が、最盛期ののちに急速な終焉を迎えることである。1860年代から平均して100点前後が発行され、1893年には過去最高の132点を記録した「三巻本」小説は、1894年に大手貸本業者ミューディとスミス社が各出版社にある通告書を送ったことをきっかけに、それまでの貸本業者と出版者との互惠関係に亀裂が入り、翌95年には32点に激減し、97年を最後に事実上消滅する。⁷また、そうした文学市場の不健全なありかたを糾弾するように、1891年にはジョージ・ギッシングによる『三文文士』(*New Grub Street*)が刊行され、出版者との経済的な隷属関係にある作家の劣悪な執筆状況が描かれた。Andrew McCannによれば、この作品が刊行された事実は、文学の商業的側面がかつてないほど顕在化してきた程度の高さを示しているという(McCann 30)。つまり、「作家協会」が立ち上げられた時期は、「三巻本」という高額な出版形態が標榜するように、それまで作者ではなく出版者が牽引してきた後期ヴィクトリア朝の文学市場において、出版者に隷属する形で執筆してきた作者が、次第に文筆業の商業的側面を意識し始め、作品の市場価値にたい

する現実的な権利を要求するようになっていった、いわば過渡期であったといえる。

本稿は、イギリス「作家協会」の設立を、「三巻本」の慣習が事実上終焉を迎える前段階において、文学市場の変動を予感した社会的な反応のひとつと捉え、その活動方針のありかたを詳細に検討しようとするものである。急速に商業化していく後期ヴィクトリア朝の出版業界において、職業作家の代弁者たらんとする「作家協会」は、その変化が文学作品の質に及ぼす影響をどのように捉え、先の展開をどのように思い描いていたのか。その問題意識のありかたを、設立当初の「作家協会」の活動方針を検討してたどるのが、本稿の目的である。

その際、主な考察対象とするのは、「作家協会」が 1890 年から現在に至るまで機関誌として発行している *The Author* というジャーナルである（創刊時は月刊、現在は季刊となっている）。ベザントは、協会設立当初から小冊子を何度か刊行したが、会員数が増加するにつれて、協会の活動内容を会員に広く知らしめ共有できる場としての情報伝達機関の必要性を感じ、自らが編集者を務める *The Author* を創刊した。創刊号が出版された当時は、「少なくとも一年は続ける」ことを予定していた⁸ が、結局ベザントは 1901 年 6 月号を最後に、逝去をもって編集者の座を辞するまで自らジャーナルを運営した。Robert A. Colby によれば、「創刊から最初の 10 年間」の *The Author* は、編集者ベザントの「延びた影」のような存在として見なすことができるという (Colby 114)。また、そこにはベザントの他にも当時の著名な作家による寄稿や読者の投稿が掲載されており、著作権や市場における文学作品の価値に関するさまざまな意見が交わされた場としても注目に値する。McCann によれば、このジャーナルの存在は、次のようなものと捉えられるという。

The Author and the related publications of the Society offer a significant achieve, constituted by some of the leading literary figures of the day, out of which it is possible to trace the modern conception of the author that corresponds most closely to the commercialization of literary culture and the emergence of a mass readership. (McCann 33)

本稿は、このような観点に立ち、ベザントが編集者の座を辞する 1901 年までの *The Author* を考察の対象として、設立当初の「作家協会」の活動方針をたどっていく。それは、「作者という近代的な概念」が構築されていく過程で起こったひとつの時代的な変化を捉えようとする試みだといいかえることもできるだろう。

1. *The Art of Fiction* をめぐる論争とその影響

まず、協会設立当初の 1884 年における発起人ベザントの個人的な見解を確認するうえで取りあげたいのが、彼が 1884 年 4 月 25 日にイギリス王立科学研究所で行なった *The Art of Fiction* という講演である。この講演において、ベザントは文学市場の中心商品であった「フィクション」つまり小説を、絵画や彫刻、建築、音楽などと並ぶ「芸術」として見なすべきだと提言し、小説には他の芸術様式同様に「アート」つまり技法があることを、持論をもって説明した (Besant 3)。しかし、ここでベザントによって論じられた「小説の技法」とは、「小説家は自分の経験に基づいたことを正確に書かなければならない」という主張 (Besant 17-18) に端的に見られるように、素朴なリアリズム小説を想定した方法論であり、むしろ、この講演の内容に反論した同年秋のヘンリー・ジェームズによる同名のエッセイのほうに、批評家の関心が集中する結果となった。ジェームズは、ベザントの主張に反論し、「軍隊生活を経験したことのない田舎育ちの若い女性でも軍人の性質や生活を表現できる」といい、実体験を記述することより想像力をもって人生の「印象 (impression)」を描写すべきである、という独自の創作理念を展開した (James 64)。

このエッセイに端を発したジェームズの小説創作理念が、のちのモダニズム小説家たちにも大きな影響を与え、批評家の関心を集めた一方で、ベザントがこの講演で訴えようとした主旨については、これまで大して問題とされてこなかった。そうした経緯について、Wim Neetens は次のように指摘している。

In criticism we find Besant produced as a Philistine but amiable populist, a deluded and outdated optimist – the better to set off James's 'mature' and 'definitive' contribution to the English novel. (Neetens 248)

ここで指摘されているように、イギリス小説史において、ジェームズの果たしたモダニズム小説への貢献を、ただ後押しする役目しか果たしていない「時代おくれ」のベザントの主張という対立構図は、後者への関心が払われてこなかった理由を示しているといえる。

しかし、こうした両者の図式化された対立構図が、ベザントの講演の主旨を汲み取ろうとする試みを阻んできたとはいえないだろうか。というのも、ベザントが主張した「小説家は自分の体験に基づいて書かなければならない」という点については、講演翌日の 26 日付の *Pall Mall Gazette* において早々に疑問視されており⁹、ジェームズがエッセイで展開したような「経験したことのない題材を扱ってもいい小説は書ける」ことを例証する反論は、同月 30 日に同紙面上でアンドリュー・ラングが小説家ウィーダの作品を挙げて行っている¹⁰ からだ。つまり、ジェームズの反論の一部は、当時の批評家がすでに指摘していたことと重複する点があるにもかかわらず、ベザントの講演の主旨をジェームズの獨創性との対比によって図式的に捉えるというのは、いささか乱暴すぎるといえるのだ。

従来、両者の *The Art of Fiction* を対置して、その創作理念を比較すると、ベザントの論理的な「素朴さ」を指摘し、それを踏まえて、「ジェームズは何を言わんとしていたのか」という問いのほうに批評家の関心は集中する傾向があった。たとえば、両者の「論争」について、Mark Spilka は論の冒頭でベザントの講演内容の「不注意な矛盾」を指摘して、「それではなぜジェームズはこのような愚かな戯言を相手にしたのか」という問いを立てて、ジェームズの真意を読み解こうと試みている (Spilka 102)。しかし、一方のベザントにとって、ジェームズの文学的見解がまったく相容れないものだったわけではないということは、*The Author* の内容をたどっていくと見えてくる。なぜなら、のちにベザントは、*The Author* において、複数回にわたりジェームズの文学批評についての見解を再録して紹介しているからだ。たとえば、1891 年 7 月号では、ジェームズの *New Review* 5

月号に掲載された次のような記事を紹介している。

Not only do I not question in literature the high utility of criticism, but I should be tempted to say that the part it plays may be the supremely beneficent one when it proceeds from deep sources, from the efficient combination of experience and perception. (*The Author*, II.2. July 1, 1891. 50)

たしかな批評の重要性を訴えるジェイムズの意見に、ベザントは協会機関誌上で同意している。また、1892年1月号では、*Literary Criticism* というタイトルがつけられたジェイムズのエッセイを抜粋し、昨今の定期刊行物において、作品評が溢れかえっている現状は「review 書評の習慣から生じているのであって、一般的に、それは criticism 批評の技法とは全く共通するものを持たない」という彼の一貫した見解について、ベザントはくり返し共感を示している。¹¹

したがって、「小説の芸術性を判断する上でその技法を評価する明確な批評精神を持たなければならない」という点において、ベザントとジェイムズの *The Art of Fiction* における主張は一致していたといえるだろう。しかし、前者の素朴で単純な主張が後者の深遠で難解なものに対比されたとき、ベザントの講演の主旨は問題にするまでもない「時代遅れ」のものとして、これまで十分に考察されることすらなかったのである。

さらに、こうした図式的な対立構図が、「作家協会」を運営するベザントの社会的評価に否定的な影響を及ぼしてきたといえる。当時、ベザントが作家の売り上げに対する正当な取り分や著作権契約について広く協会会員に指南するにあたり、1894年に協会主催の会合に招かれたギッシングは「商売人の集まりだ」と揶揄し、¹² 会員となったマリー・コレリーは、その商業的プラグマティズムの精神風土からは距離を置きたがっていた¹³ という。実際、作家のなかには、「作家協会が芸術を商業化していると思って」加入するのを拒むものもいた (Colby 115)。このように、ジェイムズを真の芸術家として称揚する一方で、ベザントを偽善的な商売人と見なす傾向は、ひいては、協会の存在自体を金銭的なことに関連する法的権利だけを要求する団体として見なす傾向も強めたといえる。

しかし、「作家協会」の存在を、芸術対商業という二項対立の構図に押し込めていては、その意義を十分に理解することはできない。なぜなら、この種の協会への偏見は、まさにベザント自身が協会の活動をつうじて誤解を解こうとしてきたことだったからだ。ベザントは、1892 年に協会の年次総会で行った講演において、これまでの 9 年間の活動を振り返って、創設当初に周囲から寄せられた反発は、文学の商業的側面に作家自らが言及することへの戸惑いであったと理解し、次のように述べている。

Literary property, we were given to understand quite clearly, was to be considered as a sacred ark which none but the priests, i.e. those who had it already in their hands, might touch.¹⁴

こうした「不可侵の領域」と見なされてきた文学の商業的側面に「作家協会」は全面的に踏み込み、その試みをつうじて「職業としての文学に関わる全ての真実を公にすることが協会設立当初の目的のひとつであった、とベザントは述懐している。¹⁵

つまり、*The Art of Fiction* をめぐる論争とその影響を今一度問い直すことは、「作家協会」の活動方針のありかたへの先入観を払拭することでもありといえる。少なくとも「作家協会」が成長していく過程には、文学の「芸術的な価値」を深慮せず「商業的な価値」を追求する団体といった短絡的な理解では説明できない複雑さが見受けられる。そのため、先のベザントの講演を「作家協会」設立時の基調講演のひとつとして捉えた場合、その主旨を歪めることなく理解する試みが重要なのである。

2・「作家協会」の目指す方向性とその展開

それでは、改めて、ベザントが *The Art of Fiction* という講演において、もっとも主張したかったことは何だったのか。そして、協会の目指す方向性はどのようなものだったのかを、次に見ていきたい。講演の主旨を捉えるうえで、注目すべきところは次の箇所である。

I am certain that if these laws were better known and more generally

studied, a very large proportion of the bad works of which our critics complain would not be produced at all. And I am in great hopes that one effect of the establishment of the newly founded Society of Authors will be to keep young writers of fiction from rushing too hastily into print, to help them to the right understanding of their Art and its principles, and to guide them into true practice of their principles while they are still young, their imaginations strong, and their personal experiences as yet not wasted in foolish failures. (Besant 33, 下線は引用者)

ここで、ベザントは小説家を志望する若者たちが世に出るうえで、作品のよしあしを判断するための指南となる小説技法の法則 (**these laws**) が広く知られるようになれば、駄作の無謀な出版を防いでより良い作品が生み出されるといい、新たに創設された「作家協会」がその導き手となれることを期待すると述べている。小説の芸術性について述べた講演も終盤に差し掛かったところで、これまで言及されてこなかった「作家協会」の設立についてアナウンスすることの唐突さを感じさせるからこそ、この箇所は注目に値する。ベザントにとって、講演の第一の目的は、文学市場の中心商品であった「小説」にも他の芸術様式と同じく技法が存在するということを主張することであり、その技法を指南することによって、この先に生み出される作品の質の向上を促すことが「作家協会」創設の意義だと公言するのが、これまで見過ごされてきた第二の目的であったといえるのではないだろうか。

その一方で、ベザントが講演題目として掲げた「**The Art of Fiction**」という言葉に託した意味については、ジェイムズのそれと比較して、彼自身それほど注意を払っていなかったといえる。なぜなら、のちに協会機関誌が発行されるようになると、ベザントは *The Author* のなかでも幾度となく「**The Art of Fiction**」というタームを使うが、それに込められた意味は小説を創作するための「専門的な技術」という程度のものである。たとえば、ベザントが初めて機関誌上でこの言葉を使ったのは1890年10月号においてであるが、そこで彼は次のように述べている。

[T]he art of fiction never stood on a higher level than it stands to-day. ... I say that the names of Black, Blackmore, Rider Haggard, Hardy, Howells,

James, Litton, Meredith, Murray, Norris, Oliphant, Payn, Stevenson ... are names of writers who have advanced and are advancing the Art of Fiction. If anyone will take the trouble to read the novels of fifty years ago ... he must acknowledge that the art is far better understood now than then, that the style is infinitely better, that the work is more dramatic, cleaner, and clearer, better finished – in a word, that the modern work far surpasses the older work. (*The Author*, I.6. Oct 15, 1890. 131、下線は引用者)

ここで、ベザントは「小説の技法が今日ほど高いレベルに達したことはない」といい、そして当時の著名な小説家の名前を列挙しながら、「彼らの作品によってそれは日々進化している」と述べる。ベザントが、ひとつめを「the art of fiction」と小文字で表記したのに対し、もうひとつを「the Art of Fiction」と大文字に変えた意図は、「一般的な小説の技法というもの」にたいして「昨今我々が問題としている小説の技法なるもの」という多少の差別化をすることにあつたのかもしれないが、その評価基準は、ベザントの言葉によれば「よりドラマチックで、欠点が少なく、明解であり、終わり方がいい」ものをよしとする大雑把な判断に基づくものであり、イギリス小説が向かうべき将来的な理想像を示そうとする野心的な主張ではない。

こうしてみると、ベザントの「The Art of Fiction」というタームが、ジェームズのような独自の芸術性の追求とは異なった関心によって打ち出されたものであることは明らかだが、こうした小説の芸術性をはかる評価基準があることを強調することによって、ベザントは協会の活動をどう展開させようとしていたのだろうか。それは、先ほど見た講演でも彼が言及していたように、その存在が若き作家志望者にとって指南となりうるという点が重要になってくる。1891年4月号の機関誌上で、「小説の技法」があるということはそれを習得させれば誰でも小説家を養成できるということなのかという *Saturday Review* と *Spectator* の記事について反論するかたちをとって、ベザントは次のように述べている。

At this Society, I am happy to say, we have been enabled, without fuss and parade, to clear the way for a good many young writers who have come to

us for help. We have not created novelists, we have not tried to do so, we have only taught them what it is to be a novelist, and we have given them a few elementary lessons.(The Author , I.12. Apr 15, 1891. 319、下線は引用者)

ここで、ベザントはこの時点までの協会の活動を振り返り、協会に助言を求めてきた若い書き手たちにたいして、作家への道へどうまく誘導してきたという。そして、「我々は小説家を創り出したわけじゃないし、そうしようと思ったこともない。ただ小説家になるとはどういうことなのかを教え」たにすぎないと述べている。ここで重要となるのは、協会側のこうした指導は、才能のあるなしに関わらず全ての作家志望者を出版まで導いてきたわけではなく、出版にこぎつけたとしても全く売れる見込みのない原稿に関しては考え直すように働きかけた場合も含んでいるということである。ベザントは 1892 年の年次総会において、次のように明言している。

We have been accused of fostering the ambitions of the incapable, and of helping to flood the market with trash. Far from it; we dissuade by every means in our power the incapable; we have readers who give them the plain truth; we advertise warning against paying for the publication of MSS.¹⁶

1884 年の講演で、ベザントが「批評家の酷評するような駄作がこれ以上世に出ることのないように」と述べていたのと同じように、彼は「小説の技法」の存在を強調することによって、これからの若き書き手らに「小説家になるとはどういうことなのか」ということの真意を理解させようとして、ときには積極的に、ときには消極的に働きかけていたのだといえる。それは、小説の芸術性を評価する一定水準が存在することを前提として、その作品が市場に商品として出ていいものか、そのレベルを審美する「職業作家」としての自意識を芽生えさせることを意味している。そうした働きかけが、評価基準の厳格化という形を取らず、職業倫理意識の共有化という形でなされていったところに、「作家協会」の活動方針の特徴があったといえるだろう。

3・アマチュアの淘汰とその意義

ベザントは、こうした「職業作家とは何か」という問いについて、協会 設立当初から自覚的であったといえる。その上で、「職業作家として権利 を主張できる団体」としての「作家協会」を構想したといっ てよいだろう。というのも、ヴィクトリア朝は、急激な読者層の拡大により小説へ の需要が高まった結果、「多少なりとも文章が書けるものなら誰でも」小説執筆に手を染めることの許された時代であったからだ。¹⁷そして、1880年代から90年代にかけて、文学市場に氾濫した三文文士の存在が、出版 者に隷属する作家の劣悪な経済状況を増長させていた。ベザントは、こ うした労働状況を改善するためには、作家が出版契約についての知識を共有 し、正当な権利を主張するとともに、作家ひとりひとりが職業作家として の自覚と、不当な対価で駄作を量産することを禁じる職業倫理観とを持つ ことが不可欠だと理解していたといえる。1892年4月号の *The Author* において、1891年の協会の活動を振り返るレポートのなかで、ベザントは 次のように述べている。

The dependence of writers, no doubt, greatly increased by the continual influx of those who have no business to take up literature as a profession, and no capacity to do more than the production of books which are not wanted, and of literary work which is purely hack. There must always be such writers. Let us do our best to urge and persuade those who would swell the unhappy ranks that in any other line – any other – a more easy living, with more money, more independence, more self-respect can be obtained than in the lowest walks of literature.(*The Author*, II.11. Apr 1, 1892. 353、下線は引用者)

ベザントはこのように述べて、職業作家は出版者に隷属することなく、金銭的にも精神的にも自立を獲得することが創作活動において重要であり、その作家の自立を促すために「作家協会」は存在すると主張した。そして、そうした職業作家の地位を確立するために、「作家協会」は出版契約における正しい知識を教示するとともに、作者個人の職業倫理を問い、それを持たないアマチュア意識の作家の淘汰にも働きかけていったといえ

る。

このようにアマチュアの淘汰に働きかける「作家協会」の活動は、先に見たように、当時からすでに、作品に対する金銭的な権利だけを主張する団体のように誤解される傾向にあったが、その真意は、書き手の経済的、精神的自立を獲得することによって、これからの作品の質の向上を促すことにあった。ベザントは、職業作家は執筆に際して芸術性か利益かどちらか一方を追求するのではなく、その両方を意識しなければならず、その地位は、両者を混同することなく執筆を遂行することによって初めて確立されると考えていた。1890年11月号の *The Author* において、ベザントはこのような作者の立場について次のように述べている。

Literature, in all times, has had two sides – the artistic and the commercial kind. ... Let us not confuse these two sides of the literary profession. They are equally important, because unless the latter is looked after, the artist perishes. Both must be guarded jealously, the one because Literature is Art, and the other because the artist must be a free man – not the slave of the man who has the money, nor a hack, nor one who drives his pen all day long for a daily pittance, nor a man continually fretted by a sense of wrong and injustice, real or fancied. When, therefore, we insist continually upon the necessity of safeguarding literary property, of understanding what is meant by an agreement before we sign it, we are working in the highest and best interests of literature. (*The Author*, I.7. Nov 15, 1890. 163, 下線は引用者)

ベザントはこのように述べ、だからこそ、「作家協会」の活動が文学の芸術性を守ることに貢献できると主張する。ここで注目すべきは、ベザントが改めて ‘profession’ という言葉を用いている点である。ベザントは他の箇所でもしばしば文学を ‘profession’ と呼んでいる¹⁸が、その意図は、作品の文学市場における価値を考えたとき、職業作家であれば、必ずその商品的価値と芸術的価値の両者を検討しなければならず、その価値判断を出版者に委ね経済的に隷属するものは淘汰される時代に來たのだ、と謳うことになったといえる。

ベザントが文学を ‘profession’ と呼ぶことにたいして社会的是認を求め

る熱意は、‘Literature as a Profession’ という表題がついた記事に、最も端的に現れている。1899年6月号の *The Author* において、ベザントは「X」とされる匿名の読者による投稿をコラムに掲載し、文筆業はいまだその道だけで生計が成り立つ立派な稼業であるとはいえないのにも関わらず、「作家協会」は無責任に専門的職業であるかのように謳っているとの非難文書を紹介している。そして、それへの反論として、ベザントは前述の表題を掲げた記事において、次のように述べている。

Now, there is this great difference between a profession and a trade – that the latter need not cease with the death of the practitioner. The professional man stands alone. His success does not depend upon goodwill, connection, old-standing, or family reputation: it is his own. (*The Author*, X.1. June 1, 1899. 15、下線は引用者)

ここで、ベザントはたんなる「商売」と「プロ」という意識との違いを説明したうえで、職業作家の「個」としての側面を強調する。また、それは「小説のみならず、文学のあらゆる形態」に当てはまると付言している。しかし、この記事の主張はさらなる「X」からの反響を呼び、安定的収入の見込みがあるという実例も示せないのに文筆業へと若者を「そそのかす」協会の活動を、なおも糾弾する文書が寄せられた。そもそも両者の争点のずれは、文学を‘profession’と呼ぶことの意味合いが異なっていることから生じているといえるだろうが、ベザントは根気強く同年8月号でその投稿も掲載し、再び巻頭コラムである‘Notes and News’において反論を試みている。そこで、ベザントは文学を職業として志すものは、法律や医学と同様に、自分の仕事を評価する審美眼を養う「職業訓練」が必要であると指摘する。

[I]s Literature a profession? It is always said that anyone may come in without previous training or apprenticeship. Every year a new novelist arises: sometimes he stays: sometimes he goes up like a rocket, and so down again in obscurity. But who knows by what preliminary studies, reading, practice, he has qualified for the work? ... Literature, proper, is the work of industry and patience work with natural aptitude. (*The Author*, X.3.

August 1, 1899. 68、下線は引用者)

このように述べた後、ベザントは‘I call Literature a Profession’と断言している。こうした一連の *The Author* 誌面上での読者との論争からも、いかにベザントが「作家協会」の活動方針として、職業倫理意識の共有化を重視していたのかが伺えるだろう。そして、その意図は、「個」としての自覚をもつことによって、出版者に経済的にも精神的にも隷属しない職業作家としての「自立」を促すことにあったといえるだろう。

結

これまで見てきたように、「作家協会」の活動方針は、文学の「商業的価値」と「芸術的価値」の両方を等しく重視しようとするものであった。そのために、出版契約における法律の整備など現実的な問題に対応するだけではなく、書き手に職業作家として作品を出版するということの社会的責任を自覚させ、経済的にも精神的にも自立させるために働きかけた。その反面、ベザントの講演内容に端的に表れているように、「小説の技法」をめぐる論争においては、実用主義的な方法論を示すにとどまり、機関誌上においても、当時の特定の作家や派閥、芸術運動を擁護したり批判したりする見解は見受けられない。その活動方針は、これからの文学が目指すべき芸術的方向性を掲げるのではなく、これからの作者が持つべき職業倫理観を育むことに重きを置いていた。そして、文学作品の芸術的価値についての統一的な見解を固辞しなかったことによって、ベザントは多様な価値観に基づいて創作する既存の作家たちの賛同を得ることに成功したといえるだろう。こうした協会の活動をつうじて、「近代的な作者という概念」が構築されていく過程に見られたひとつの時代的变化を捉えたとき、そこに確認されたのは、「作者」という存在がそれまで以上に「個」としての側面を強く意識される対象として変わっていくなかで、その変化を促したのは、必ずしも著作権を専有できる「作者」の権利を求める声だけではなく、生み出される作品の質の向上を追求する「作者」の自立を求める声でもあったということではないだろうか。

注

本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第14回大会(2014年11月8日、於・上智大学)において口頭発表した内容に、加筆修正を行ったものである。

また本稿は、科学研究費補助金若手研究(B)、「イギリス文学史における『作家協会』設立の文化的意義」(課題番号 24720142)の成果の一部である。

- 1 Walter Besant, *The Society of Authors: A Record of its Action from its Foundations*, ([London:] Incorporated Society of Authors, 1893), p.7
- 2 Victor Bonham-Carter, *Authors by Profession* Vol. 1, (London: The Society of Authors, 1978), p.141
- 3 Walter Besant, *op.cit.*, p.35
- 4 Victor Bonham-Carter, *op.cit.*, pp.71-89
- 5 Walter Besant, “The First Society of Authors,” *Contemporary Review*, (July 1889), p.10-27; Victor Bonham-Carter, 前掲, p.86. ベザントは、ディケンズが賛同を得られなかったテニスンを初代「作家協会」会長に就任させることに成功したのが、協会の成長にとって大きかったと述懐している。詳しくは、Victor Bonham-Carter, *op.cit.*, p.121.
- 6 Robert A. Colby は、1838年に設立されたフランス「作家協会」の存在がベザントに先行するモデルとしてのヒントを与えたと指摘している。詳しくは、Robert A. Colby, “Harnessing Pegasus: Walter Besant, *The Author* and the Profession of Authorship,” *Victorian Periodicals Review*, 23.3 (Fall 1990), p. 111-112.
- 7 「三巻本」小説の衰退については、Troy J. Basset, “The Production of Three-volume Novels in Britain, 1863-97,” *PBSA* 102:1 (2008), pp.64-70を参照。
- 8 *The Author*, I.1 May 15, 1890, p. 3において、“We shall send out this journal to all our members as their own organ. We shall continue it for one year at least.”と説明。
- 9 *Pall Mall Gazette* は “The most practical and least paradoxical part of his discourse was advice to young people about to write – never write outside your own experience and imagination.”と明言している。
- 10 Andrew Lang は、個人的な経験に基づいて正確な知識で創作することと作品を面白くすることとは関係ないと述べ、“an artist need not write from his personal observation, nor even from accurate, second-hand study of facts.”と反論している。

- 11 *The Author*, II. 8 Jan 1, 1892, p. 233.
- 12 ギッシングは、協会の会合を “gathering of tradesmen, and very commonplace tradesmen to boot” として揶揄し、ベザントについても “respectable draper” と評している。George Gissing, *London and the Life of Literature in Late Victorian England: The Diary of George Gissing*, ed. Pierre Coustillas. (Lewisburg: Bucknell UP, 1978), p.354
- 13 Philip Waller, *Writers, Readers, and Reputations: Literary Life in Britain 1870-1918*, (Oxford: Oxford UP, 2006), p.40
- 14 Walter Besant, *The Society of Authors: A Record of its Action from its Foundations*, p.5.
- 15 *Ibid.*, p.4.
- 16 *Ibid.*, p.30.
- 17 清水一嘉『イギリス小説出版史』(東京: 日本エディタースクール出版, 1994) pp.39-71 を参照。
- 18 たとえば、“Literature is a profession” と言い切っている箇所として *The Author*, II.5. Oct 1, 1891, p.144 を参照。

引用文献

- Author, The*. 36 vols. London: Incorporated Society of Authors, 1890-1926.
- Basset, Troy J. “The Production of Three-volume Novels in Britain, 1863-97.” *PBSA* 102:1 (2008):61-75.
- Besant, Walter. *The Art of Fiction*. 1884. London: Chatto and Windus, 1902.
- . *The Society of Authors: A Record of its Action from its Foundations*. [London:] Incorporated Society of Authors, 1893.
- . “The First Society of Authors,” *Contemporary Review*, (July 1889):10-27.
- Bonham-Carter, Victor. *Authors by Profession*. Vol. 1. London: The Society of Authors, 1978.
- Colby, Robert A. “Harnessing Pegasus: Walter Besant, *The Author* and the Profession of Authorship,” *Victorian Periodical Review*, 23.3 (Fall 1990): 111-120.
- Gissing, George. *London and the Life of Literature in Late Victorian England: The Diary of George Gissing*. ed. Pierre Coustillas. Lewisburg, PA: Bucknell UP, 1978.
- James, Henry. “The Art of Fiction,” *Longman’s Magazine*, 4 (September 1884): 502-521.
- McCann, Andrew. *Popular Literature, Authorship and the Occult in Late Victorian Britain*. Cambridge UP, 2014.
- Neetens, Wim. “Problems of a ‘Democratic Text’: Walter Besant’s Impossible Story,”

Novel: A Forum on Fiction, 23.3 (Spring 1990): 247-264.

Pall Mall Gazette, The. April 26, 1884.

———. April 30, 1884.

Spilka, Mark. “Henry James and Walter Besant: ‘The Art of Fiction’ Controversy,”

Novel: A Forum on Fiction, 6.2 (Winter 1973): 101-119.

Waller, Philip. *Writers, Readers, and Reputations: Literary Life in Britain 1870-1918*.

Oxford: Oxford UP, 2006.

清水一嘉『イギリス小説出版史』東京：日本エディタースクール出版、1994.

